

白樺の若木たちまじり溪ぞひのから松林冬寂
びにけり

時雨の雨いつしか晴れて墨いろの宵の淺間に
つめる雪みゆ

うちわたす薄のはらの冬枯れて此處のひろき
に水の音ねきこゆ

冬の溪ふたつ流れあひしらじらと水うちあげ
て長き瀬をなせり

選

歌

よき歌のこよひ多きをえらみつつ心たかぶり
吐息といきはいづる

險熱くなみだぞ出づるよき歌にゆきあたりた
るうたえらみびとは

よき歌をつくるころのすぐれびとと相見る
がにも歌は選めや

冬

おほかたの木この葉散りすぎ静かなる冬は來に
けり眼にもあらはに

散り盡きていまはまつたく枯木なす櫻木立に
 馴れてたのしき
 二三軒となりつづきのはしに見ゆ冬しづかな
 る杉の木立は
 このあたり人もぬげに静かなる家居つづき
 て冬木立せり
 この一年何かは知らずうち疲れなまけつつ居
 りて冬に入るなり

冬の夜

誰か來よこよひさびしと下思ふこの冬の夜の
 心さわぎよ(その一)
 しみじみと逢ひたしとおもふ友だちの減りゆ
 きしこと今宵おもはる
 蓄音機たかだか聞ゆ凍みこほりこよひ寒きに
 となりの家に(その二)
 夜ふかくいろいろの音寄りきこゆ寒けくをれ
 ばいよいよ聞ゆ
 夜ふかくつかれてをればいたづらに火は熾^{おこ}り
 たれ沸す湯もなく(その三)

うとうとと電燈の灯に見入りゐて寒さをおぼ
 ゆ疲れはてけむ
 疲れ果て眠りかねつつ夜半に飲むこのウキス
 キイは鼻を焼くなり

冬ごもり

今年住むわが家は岡のうへにありていま冬景
 色うららけく見ゆ(その一)
 霜日和わが二階より見はるかすひろきにぞ見
 ゆ豊島としまが岡は

わが部屋のはしに居ま寄よれば冬空のふかきに沈
 み遠き富士見ゆ
 隣家となりなる椎の老樹のうらがれていささか隠す
 その富士が嶺を
 朝の間をあかるくさせるこの窓の冬の日ざし
 にももの書き急ぐ(その二)
 窓に見るながめあらはに冬寂びてただありが
 たき日のひかりかな
 朝はこの窓にさしつつ晝かけて縁えんにぞまはる
 冬の日ざしは

わが家のそばをとろとろ降りゆきてまがる小
 路を親しとは見る(その三)
 うつくしく散りしと見つる路ばたの落葉ひと
 日に踏みよごされぬ
 しめきりし雨戸の節をぬけてさす冬日眞赤し
 こがらし募り(その四)
 家をゆすり吹くこがらしのをちかたに啼く鶉
 鳥の聲みだれたり
 みだれ啼く木枯のなかのひよ鳥の聲よるこび
 に満ちあふれたり

明るみを心はやどすながめつつさびしきもの
 かその明るみは(その五)
 よき酒を昨日もらひつ今日はよき林檎もらひ
 ぬ冬ごもりをれば(その六)
 喰ひたしと思ひるものまことこの林檎なり
 けむまことにうまし
 夜のほどに降りつもりたる白雪の今朝をまち
 かく鶉つぐな来て啼く(その七)

平 和 來

五ヶ年にわたりし歐洲大戦漸く終り、平和を祝ふ歌をと某新聞社より求められしに答へて詠める。

英吉利の勝ちさけびつつ獨逸人負けさけびつ
つたたかひ終る
亞米利加の大統領といへるをとこ佛蘭西にわ
たる戦争終り
初なくをはりなきに似たり遠つ國邊のたたか
ひ終るといふはまことか
五年ごし永きにわたり戦ひしたたたかひのむね
を明らかにせよ

たたかひの一途なりしを勝鬨のいまとりどりに
亂れたり聞ゆ
勝つといひまけたりといふとりどりの唐人の
聲はるかに聞ゆ
たたかひの終れるあとに這ひまはる蟲けだも
のを追ひ拂へ神

上總八幡崎

断崖の岩うちそぎて建てられし宿屋のにはに
浪うちあがる(そのこ)

洞穴を湯殿と爲しつともしたるラムプはうつ
 す荒岩の壁を
 はりはりと岩にくだくる浪の音夜半ねざめ
 て聞けば寒けき
 めざめつつ静まりをれば朝日さす海のきらめ
 き部屋を染めたり（その二）
 日のひかり流れかがよふ海原にをりをりあが
 る眞冬日の浪
 朝づく日空にさだまり五百重浪かがよふ海を
 漕げる舟みゆ

めぶらなしかがよふ海に小舟ゐて漕げる人見
 ゆその舟のなかに
 わが部屋の眞むかひに遠き崖のはな穂すすき
 なびく冬空を背に
 眞むかひにきりそぎたてる断崖の下なる海の
 迅き流見ゆ
 浪型にそがれし崖にしみじみと冬の日のさし
 浪の寄る見ゆ
 ひもすがら冬日さしたるこの部屋に旅のここ
 ろか疲れてゐたり（その三）

部屋にゐて見やるはるけき斷崖きりの根に寄る浪
 は雪のごと散る
 獨りゐてひさしく坐るこの部屋の玻璃戸に觸
 りて黄なる冬草
 窓下に浪たちさわぎをりをりを小舟漕ぎ通る
 傾きながら
 夕日さす崖のさなかの岩かげに釣するらしも
 長き竿振る
 入江なる岩に日のさし浪くだけつばらに見れ
 ば雀子のゐる(その四)

楨あの葉にすすめ子あそび海人あが家の垣根に浪
 の影うつりたり
 しらじらと沖より寄する浪の穂の長くつらな
 れりこの寒き日(その五)
 寒き日の浪を避けつつ岩かげに海苔摘む海女あ
 の二人三人ゐる
 海人あどもの若きたはむれ老いたるは專念に釣
 る斷崖きりの端はなに

伊豆にて(以下大正九年)

二月十二日伊豆松崎港よりとある溪に沿ひて
天城街道に出づ。

幾年か見ざりし草の石菖の青み茂れり此處の
溪間に

十三日徒歩して天城山を越ゆ、やがて雪降り出
で山上積る事尺に及ぶ。

向つ峰の杉山の根にかかりたる岩かげの瀧は
氷りたり見ゆ

霜どけの崖ゆ落ち來るさざれ石のさびしき音
は道に續けり
土壌をふせぐと植ゑし天城越の道の榛の木み
な實を持てり
蜘蛛の網と枝を張りたる榛の木の實は眞黒く
てたまたまに青
九十九折登ればいよよ遙けくて麓の小溪なが
め見飽かぬ
見はるかす麓にほそき岩溪の水ところどころ
たぎちたるかな

天城道三極畑の側ゆけばその花にほふ雪に濡
れつつ
道下の三極畑はいちめんにさびしき花のいま
盛りなり
白白と枝張りわたし枯れて立つかの遠き木は
縦にしあるらし
冬過ぐとすがれ伏したる萱原に降り積る雪の
眞白なるかも
大君の御獵の場と鎮まれる天城越えゆけば雪
は降りつつ

見下せば八十溪に生ふる銚杉の秀並が列に雪
は降りつつ
天城山わが越ゆる道の杉の木に降り積る雪は
枝垂れそめたり
立ちどまるわが身眞白し見かへれば降る雪暗
く山を包みぬ
天城嶺の森を深みかうす暗く降りつよむ雪の
積めど音せぬ
道の上に積みゆく雪をながめつつ今は急ぎぬ
峠眞近を

岩が根に積れる雪をかきつかみ食ひてぞ急ぐ
 降り暗むなかを
 降る雪の天過ぎゆけばわが越ゆる岨の雪道明
 るみきたる
 繁山のかたへ伐りそぎ炭焼くと柚人が煙あが
 る積む雪のうへに
 かけわたす柚人がかけ橋向つ峰の岨に續きて
 雪積める見ゆ

山を越えて麓なる湯が島温泉に到る、あたりま
 た深々と雪積りたり、滞在四日。

窓さきの檜に來て啼く檜鳥の口籠り聲はわれ
 を呼ぶごとし
 檜鳥のつばさ美し庭さきの青檜のあひをしば
 しばも飛ぶ
 檜の實の落ちちらばれる溪端の苔あをきとこ
 ろ張れる檜の根
 根もとより枝しじに分れ茂り生ふる老木柎の
 花は眞さかり
 山中の温泉に來り静けしところゆるめば思
 ふ事おほし

附近に木立の淵といへる溪流あり、山の相迫れ
るところ岩秀て水深し。

たまたまにひとつ出てをる冬ざれの岩間の魚
を親しとし見ぬ
流れ寄る水泡うづまき過ぎゆけど静かなるか
も岩蔭の魚は
檜の實の落ちて沈める淵の底に影を落して小
魚あそべり

散

歩

をちかたに鴨の聲起りわが歩む冬田の畔に杉
ならびたり
ひよどりの聲の繁きにまじりつつ冬晴の森に
百舌鳥啼く聞ゆ
埋立の工事の車とるとると黒き土こぼし坂く
だり来る
新しき土つみあげし埋立の工事のそばに冬木
はあらは
田の畔の茶の木ばたけのだんだんにつらなり
光る寒き日射は

墓原のかなめの若芽くれなるに杉垣つづき伸
 びそろひたり
 おのがじし静かに立てる冬枯の丘の杉の木葉
 は赤らめり
 枯草の小野にひともと立ちてをるこの常盤木
 の影の深さよ
 ちひさくてわが子がたけにだも如かぬこの冬
 の木の影ぞ静けき
 木木の影しるくうつれる枯草のぬくとき原に
 まじる青笹

そことなき心おごりぞ湧き來るこの冬晴の静
 けきなかに

フリジヤの花

一つかみ投げざしにせるフリジヤの青き葉の
 蔭に蕾は多し
 いそがしきわれの机のすみに置かれ咲きてひ
 さしきフリジヤの花
 挿しすてて月のなかばも過ぎたらむフリジヤ
 の花に塵はかかれり

フリジャの花いつしかに褪せそめていよいよ
匂ふ机の隅に

友が家にて

この部屋の窓の障子の新しくなればあきゐて
梅の花見ゆ

門さきの梅

門出づと傘ひらきつつ大雨の音しげきなかに
梅の花見つ

泥濘ぬかるみの道に立ち出で大雨に傘かたむけて門かどの
梅見つ

見送ると門に出で來し妻を呼びて雨のなかの
梅うち讃たたへ見つ

門さきに咲きて久しき梅の花を今朝大雨のな
かによく見つ
枝伸びし若木の梅の花びらに降りそそぐ雨は
音たててをる

枝のさき入りかひみだれ大雨に雫たれつつ梅
の花咲けり

大雨に打たれ静まれるとりどりの庭木のなかに梅の花白し

同じ日に

わが門かどの前の坂道狭かるに川なして流る今朝ぬくき雨は

わがこころ澄みてすがすがし三月きんぐらつのこの大雨のなかを歩みつつ

同じ日の夜

夜爲事の部屋にうごける風ありてこの春の夜の雨はやみたり
何やらむ落ちたふれたるひびきしてこよひぬくきに風吹き立ちぬ

友が家にて

夕寒うかげり來れば庭杉の木かげの梅の花の真しろさ

湯豆腐の熱きをすすり夕まぐれ静けくぞ見る庭の梅の花を

桃のつぼみ

部屋にゐて苦しきけふの曇日の窓に見てをる
 桃の木の花を
 かき曇りぬくときけふを桃の蕾の赤みふくら
 み咲き出でむとす

秩父の春

四月六日、秩父の春を見て來むとて出で立つ、熊
 谷驛乗換秩父線に移る。

乗換の汽車を待つとて出でて見つ熊谷土堤の
 つぼみ櫻を（熊谷驛附近）
 蟻の蟲這ひありきをりうす紅につぼみふふめ
 る櫻の幹を
 雨ぐもり重き蕾の咲くとしてあからみなびく
 土堤の櫻は
 枝のさきわれよりひくく垂りさがり老木櫻の
 つぼみ繁きかも
 まひたつと羽はづくろひする口くごもりの雲雀の
 聲は草むらに聞ゆ

雨雲のなかにまひのぼり啼く聲の雲雀はしげ
し今宵晴れなむ
をちかたに澄みて見えたる鐵橋の川下うすく
夕づく日させり

その夜秩父長瀬なる溪合の宿に泊る、明くれば
數日來の雨全く晴れて鶯頻りに啼く。

溪の音ちかく澄みゐて春の夜の明けやらぬ庭
にうぐひすの啼く
部屋にゐて見やる庭木の木がくれに溪おほら
かに流れたるかな

朝あがりしめれる庭にたけひくき若木の梅の
花散らしたり
眞青なる篠のひろ葉に風ありて光りそよげり
梅散るところ
山窪に伐りのこされしわか杉の木立眞青き列
をつくれり（二首、車中所見）
わが汽車に追ひあふられて蝶蝶の溪間に深く
まひ落つるあはれ

秩父町にて少憩、其處より表秩父に出てむとし
て妻坂峠を越ゆ、思ひの外の難路なり。

秩父町出はづれ來れば機織の唄ごゑつづく古
りし家並に

春の田の鋤きかへされて青水鏽着くとはしつ
つ蛙鳴くなり

朝晴のいつかくもりて天雲の峰に垂りつつ蛙
鳴くなり

下ばらひきよらになせし杉山の深きをゆけば
鶯の啼く

岩づたひ落ち落つる水は八十にあまり分れて
ぞ落つこの岩の溪は

つぎつぎに繼ぎて落ちたぎち杉山のながき峽
間を落つる溪見ゆ
めづらしき大樹の馬酔木山溪の斷崖逆に咲き
枝垂れたり
春あさみいまだ芽ぐまぬ遠山の雑木の林ひろ
くもあるかな
菅山のいただき近く枯菅の枯れなびくところ
岩が根の見ゆ

辛く峠に出で嶮しきをやゝ下りゆけばまたひ
とつの溪に沿ひたり、名栗川の上流なり。

春立つとけしきばみたる裸木の木の根をあら
 ふ岩溪の水
 岩ばかり土の氣もあらぬ溪合の岩のうへの木
 つのぐめり見ゆ
 桐畑の桐の木の間に植ゑられてたけひくき梅
 の花ざかりかも
 假橋のひたひた水にひたりたる板の橋わたり
 梅のはな見つ
 溪の端はた褪おせし老木の梅になりひともの梅
 真さかりに咲く

一夜を小さき鑛泉宿に過し翌日名栗川に沿う
 て飯能町に出づ川小さけれど岩清く水澄みた
 り。

わかし湯のラヂウムの湯はこちたくもよごれ
 てぬるし窓に梅咲き
 溪ばたの老木の梅は荒き瀬のとびとびの岩に
 散りたまりたり
 何やらむ羽蟲のむれのまひ群れて溪ばたの梅
 の花にあそべり
 しらじらと流れてとほき杉山の峽の浅瀬に河
 鹿なくなり

清らけき浅瀬ながらに波をあげて杉山の根を
 流れたるかな
 ところどころ枯草のこる春の日の溪の岩原に
 鶴鴿の啼く
 手を洗ふにほどよきほどのほそき瀧きよらに
 かかる道の傍に
 うづだかく杉苗負ひて岨みちを登れる柚人は
 うたひ出でたり
 溪堰きて引きたる井手の清らかに流れたるか
 も春あさき田に

黒々とおたまじやくしの群れあそぶ田尻のみ
 づは浅き瀬をなせり
 蛙鳴く田なかの道をはせちがふ自轉車の鈴な
 りひびくかな
 馬の糞ひろひながらにこの爺のなにか思ふら
 しひとりごと言ふ

宇都宮市にて

ひとしきり散りての後をしづもりてうららけ
 きかも遠き櫻は

町なかの小橋のほとりひややけき風ながれる
てさくら散るなり

上州吾妻の溪にて

朝づく日峰をはなれつわが歩む溪間のあを葉
透き輝けり
朝づく日さしこもりたる溪の瀬のうづまく見
つつこころ静けき
静かなる道をあゆむとうしろ手をくみつつお
もふ父が癖なりき

飛沫しづきよりさらに身かろくとびかひて鶴せき鴿れいはあ
そぶ朝の溪間に
溪あひにさしこもりたる朝の日の蒼みかがや
き藤の花咲けり
荒き瀬のうへに垂りつつ風になびく山藤のは
なの房長からず

伊太利飛行機來

永き間わが興味をひきたりし伊太利の飛行機
終に六月三十日代々木原に到着す、當日早朝よ
り其處に待ちて。

汝を待ちつつ青草のうへにわが置ける時計は
ひびく眞晝近しと

おお今し汝を迎ふとわが國の飛行機はのぼる
天雲をさし

宙がへり木の葉おとしのさまざまなれや汝を
迎ふとわが飛行機は

千よるづの人息をのみて立ちむかふその飛行
機は雲のあひに見ゆ

濃くうすく雲がくりつつひとすちに空わけき
たるその飛行機は

出で迎ふわが飛行機と中ぞらにかたみに環を
なし翔ひ澄めるあはれ

うるはしきその飛行機はありありとわがまな
かひに翔ひうかびたれ

伊太利の旗じるし染めてまなかひに翔ひうか
びたりその飛行機は

青草の五月の原をとどろとどろうちとどろか
し飛行機くだる

夏のしののめ

朝静のつゆけき道に墓ひきいでてあそびてぞをる
日の出でぬとに

旗雲のながれたなびき朝ぞらの藍のふかきに

燕啼くなり

竹煮たけに草鐵道くさてう草のたけたかき草しげりあひて眞

白花咲けり

まひ降りて雀あゆめる朝じめり道のかたへの
つゆ草の花

香貫山

八月中旬、東京を引拂ひて駿河沼津在なる楊原
村香貫山の麓に移住す、歌を詠み始めたるは九
月半ばなりけむか。

海見ると登る香貫かぬきの低山の小松が原ゆ富士の
よく見ゆ

香貫山いただきに來て吾子わことあそび久しく居
れば富士晴れにけり

低山の香貫に登り眞上にしそびゆる富士を見
つつ時經ぬ

南風

南吹き曇りかげれる愛鷹の峯に居る雲深くも
あるかな

汐風のみなみ吹きつのもり終れり

照り曇りはげしき地にみなみ風吹きすさびつ
つ富士冴えてをる

みなみ吹き雲湧き散れる空のもとにただに眞
青き香貫松山

雑

詠

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣な
せる愛鷹の山

愛鷹の眞くろき峯にうづまける天雲の奥に富
士はこもりつ

夏おそき空にしづもれる富士が嶺に去年の古
雪ひとところ見ゆ

門出でて向ふ稻田の千町田の垂穂の畔に彼岸
花咲けり

富士が嶺に雲かかりたりわが門のまへの稻田
に雀とびさわざ

鶏とりににやる蝗いんせとるとて出でて來し稻田はいまは
 なかば刈かりられつ
 刈りあとの泥田に逃げて飛ぶ蝗追ひかねて見
 ればいよよとびゆく
 柿紅葉ほろば上枝えはいつか散りすぎて百舌鳥もずぞ來て
 啼くおほかたの日を
 わが門のまへをながるる小流に散りうかぶ葉
 のやうやく繁し
 散りうかびまたくは濡れぬ櫻木のもみぢは流
 る門のながれに

やや寒み火鉢の灰をつくるとて藁火たきつつ
 ところは静か
 けふ初めて火鉢を置けばわが部屋の障子しやうじのや
 ぶれ氣にかかるかな
 綿雲の四方よを覆ひておぼほしきけふくもり日
 の庭のもち葉
 花を多み眞赤に見ゆる門口の山茶花をうとむ
 朝な朝なに
 愛鷹あいたかの襞ひたのもみぢのつばらかに見ゆる沼津の
 秋日和かな

小松山香貫の秋に沼津なるうたひ女出でて群
れあそびをり
わが門にならぶ櫻のうすもみぢ久しと見つれ
いまは散りたり
消つ降りつさだめなき秋の富士が嶺の高嶺の
雪を朝な朝な見る

庭の隅

庭石を斜かたにすべれる眞冬日の日かげは宿る藪
柑子の實に

實をひとつふたつ持ちたるとりどりの藪柑子
の木ならび生おひたり
松が枝えの下枝したえはひくく地に垂りて上枝うへえの落葉
散りたまりたり

散歩

このあたり道邊におほき蒜ひびの花の露のしめり
はひねもすにして
葛くわの葉のもみでし色のさびはてて露おきわた
す道のかたへに

道のはた野菊にまじり露草の散りのこりつつ
 木瓜^けかへり咲けり
 下草のすすきしめれる山あひの小松が原にひた鶴
 啼くなり
 ゆく道の山の根ぞひにたちならぶ冬の日の松
 に枯れし葉おほし
 桑の葉のおち葉新しき畑道のこのあたりしげ
 き鳥の聲かな
 桑の木の老いて枝張るこずるより啼きてとび
 たつ頬白の鳥

友 來 る

213
 信濃なるつばくら嶽のみねに生^なひし梅^{うめ}の木を
 植う其處より持ちて
 青苔につつま持てこし梅の木のそのちひさき
 があをあをと居^をる
 家にゐて家族とよからずあさゆふにさびしき
 友を此處に迎へぬ
 汝がままに此處に寝てゆけ部屋ひとつ貸しは
 興へむ汝がままにせよ

やき鳥

木曾路なる奈良井の溪に網張りてとりし小鳥
 ぞ焼けと送り來ぬ
 鴨ひとつ鴨ここのつとりどりの鳥のあはびに
 もみぢ葉を敷けり
 合歡の木と我はもおもふ手づくりの小包の箱
 の眞新しさよ

雑詠

愛鷹の傾斜にしげき襷ごとに籠らふ雲は朝亂
 れたり
 愛鷹に朝居る雲のたなびかば晴れむと待てや
 富士のくもりを
 綿雲の湧き立つそらに富士が嶺の深雪寂びつ
 つかがよへる見ゆ
 赤飯の花と子等いふ犬蓼の花はこちたし家の
 めぐりに
 ときは樹は遠きに光り柿紅葉やはらかなれや
 窓のひなたに

刈株の蕎麥が根赤き霜月の香貫が原に雲雀る
 て啼く
 雪降りていまだ日を経ぬ富士が嶺の山の荒肌
 つばらかに見ゆ
 めづらしきこの霜月の日照雨に庭のもみぢ葉
 いろぞ滴る
 わくら葉の散りのこりたる桑畑のなかに晝餉
 す百姓たちは
 鋤きあげて真くろき土のうへに坐り煙草すひ
 をり老いたる人は

述

懷

ゐつ立ちつ甲斐なくひと日すごす癖とりのぞ
 きえで年は重ねし
 静やかに今はなりぬとおもふ時事起るなりわ
 れの生活に
 庭さきに散れる松葉の静けさのあれと願ひて
 籠居はする
 愛憎のうごきやすまぬ底淺のこころの濁り澄
 む時ぞなき

愛鷹登山

十一月十五日愛鷹山に登る、中腹以上は廣大なる御料林にて古木枝を交へ相連れり。

裾野かけて今は積みけむ富士が嶺の雪見に登る愛鷹の尾根を
 峯に夙く登らばひとと向ひあはむ富士をおもひてなだれを登る
 熊笹のさゆらぎたちておほきなる雲は過ぎゆくわれの眞うへを

大君の御料の森は愛鷹の百重なす巖にかけて繁れり
 大君の持たせるからに神代なす繁れる山ぞ愛鷹山は
 この山のなだれに居りて見はるかす幾重の尾根は濃き森をなせり
 峯ちかき幾重の巖はおほきなるひとつに落ちて深き森をなせり
 わけ入りて静かに居れば海底のしづけさを持ちちてこの森は居る

さしわたす向つ峯のとがりけはしきに伸びぬ
 る森は落葉してをる
 蜘蛛手なす老木の枝は黒鐵のいぶれるなして
 落葉せるかも
 繁山のいただき近み生ふる木のたけ高からず
 枝は張りたり
 張りわたす蜘蛛手なしつつ老いし木の枝の繁
 きに紅葉過ぎたり
 時過ぎていまはすくなき奥山の木の間の紅葉
 かがやけるかな

際やかに深き紅葉のひともとを目じるしとし
 て森わけあそぶ
 散りつもる落葉のいろの鮮かさ手にし掬へば
 いやあざやけき
 愛鷹のいただき疎き落葉木に木がくり見えて
 富士は輝く
 愛鷹の峯によち登りわがあふぐまなかひの富
 士は眞白妙なり
 山なだれなだらふ張の四方に張りてしづもり
 深き富士の高山

山の根の淵

流るとしあらぬとろみの青淀に一すぢうつる
 われの釣糸
 やごとなきおもひにもあるか持つ竿に垂りた
 る糸は張りてたるまぬ
 淵のくまにあらはれてゐる白き岩の冬はいよ
 いよ眞白なるかな
 向ひ岸おそき紅葉の照りてゐて静かなるかも
 冬の日の淵

山の窪

たけひくき小松ならべる山の窪日ざし寒けど
 去りがたきかも
 わが憩ふ窪みにふかき草むらの雑草しごぐさの花は秋
 さびにけり
 ひとりゐるの心ゆたかに腹ばひて足伸ばす此處
 の草むらは冬
 濃きけむりながれもゆくよ冬草のかげに坐り
 て煙草を吸へば

とびあそぶ蝗いなごをとりて吸ひてをる草むらの巢
のうつくしき蜘蛛

時

雨

夜半を降るしぐれの雨は歌を思ふわれのここ
ろに浸しみひびくなり(その二)
戸のそとの闇に降るなる夜の時雨こころにひ
びきいよよ降るなり
しみじみと聞けば聞ゆるこほろぎは時雨るる
庭に鳴きてゐるなり(その三)

こほろぎの今朝鳴くきけば時雨降る庭の落葉
の色ぞおもはる

雑

詠

道ばたのながれにうつる月の影見つつ急げる
みちは凍れり
植ゑかへて時へぬ葱のしほれ伏し青みて土に
ならびたるかな
植ゑかへしはたけの土の眞黒きに浸しみてまよ
へり葱のほひは

庭さきの野菜ばたけにとりどりの影あざやけ
 きあかつきづくよ曉月夜
 山の根の淵に沿ひつつ一すぢの道はつづけり
 冬の日向に
 向う来る荷馬車の油きれたりや寒うきしりて
 山の根をくる
 小魚賣る女が履ける下駄の音牙えひびく冬の
 日向なりけり
 浮雲につめたくかげる入江町そぎへ岩山紅葉
 してをる

入海に寄る魚見むとたち並ぶ小屋閉きされたり
 山の高みに
 押せ漕げと櫓につかまれる若者の聲かまびす
 し入江の奥に
 茶の間より見る庭さきの冬薔薇のとぼしき花
 はつぎつぎに咲く
 落葉せる我の小庭こに珍しく小鳥ひたきが来て啼なき
 てをる
 わが離室はなれへかよふ廊下の高窓に見てすぐる庭
 は日に日に落葉

風を忌み締めすてておきし高窓を開けば庭は
 明るき落葉
 愛鷹に大雪降り百襲の真くろき森を降り埋
 みつつ

貧

窮

居すくみて家内しづけし一錢の錢なくてけふ
 幾日經にけむ(その二)
 抽匣の數の多さよ家のうちかき探せども一錢
 もなし

貧しさに追はれていつか卑しきを錢に覚えぬ
 四十路近づき(その三)
 ゆく水のとまらぬこころ持つといへどをりを
 り濁る貧しさゆゑに
 苦しみに苦しみぬけど貧乏に懲るる心はまだ
 足らぬかも
 三日ばかりに歸らむ旅を思ひたちてこころ燃
 ゆれどゆく錢のなき(その三)
 待ち待ちし爲替來りぬわが泣きし借にはらふ
 は惜しけき爲替(その四)

千本松原

千本松原は沼津の海岸にあり、狩野川の川口より起りて西數里が間に及び、老松甚だ多し。

むきむきに枝の伸びつつ先垂りてならび聳ゆる老松が群(その一)

風の音こもりて深き松原の老木の松は此處に群れ生おふ

横さまにならびそびゆる直幹なほみきの老松が枝えだは片靡なきせり

立枯の松もまじらふ松原のふかきに入れば萱の原ある

千ちよろづの松そびえたちいづれみなひたに真直まぐにひたに真青まきき

伸び伸びてななめに空にむかひ立つこの直なほき松はいまだ若き松

張りわたす根あがり松のおほきなる老いぬる松は低く茂れり

松原のしげみゆ見れば松が枝えに木こがくり見え
てたかき富士が嶺

松原につづける濱の眞しろなる眞砂まきに松はと
 びとびに立つ(その二)
 わが投げし小石の音の石原にひびきて寒き冬
 の日の影
 濱つづき大松原の際きはをなすわか松が群に夕日
 さしたり
 くもり日は頭重かるわが癖のけふも出で来て
 あゆむ松原(その三)
 松ばらの木立ふかきをぬひてまふ朝の鴉の群
 のしづけさ

梢うれ枯れし老松が枝えだにおほらかに羽根をひろげ
 て鴉はとまる

松原の海に向へるかたに美しき長濱あり、駿河
 灣深く湛へて伊豆は眞向ひにやや遙けく遠江
 見ゆ。

此處ゆ見る伊豆の國邊に二並びならびて國の
 背をなせる山
 この濱の濱石まろく深ければわが歩む音わき
 ひびくなり
 潮ぞとおもひもかぬる清らけき澄みぬる風を
 今朝濱に見つ

うちわたす小石の濱に音たててさざ波よする
今朝の風かな

見てをりてこころ澄みゆく今朝の風のうしほ
の底の青石原を

雲丹うにの子のうちあげられし拾ひとり小指こゆびささ
れぬ朝寒あさむいの濱に

うす雲と沖とひといろに煙りあひて濱は濡れ
ゆく今朝の時雨に

末とほくけぶりわたれる長濱を漕ぎ出づる舟
のひとつありけり

山櫻の歌

序

本書は先著『くろ土』(天正十年三月發行)に次ぐもので、
 大正十年正月より同十一年十二月に到るまで全二年間に詠
 んだ歌が収めてある。

序文としていま書き度い事は、おほかた『くろ土』の序文
 に書いたことと變らないので、勢ひそれを繰返すわけになる。
 故に此處には省くことにした。ただ本書を讀んで多少とも
 感興を覺えられた人には併せて『くろ土』をも讀んでほしい
 といふことを書いておき度い。著者が一生の歩みの續きと
 いふうちにも『くろ土』の頃から本書にかけての五六年の間
 には特に離しがたい因縁が結ばれてゐるやうに思はれるか
 らである。

なほこれは書かでもの事かともおもふが、氣づいたままに書きつけておく。假に動的の歌と靜的の歌といふものがあるとするならば『くるし』は動の方で本書の歌は靜的のものであるらしく感ぜらるるのだ。これはこの二冊に限らず、今までに出して來た歌集十數冊(本書が十四冊目に當る)を振返つて見ると、その間にこの二つの交替が知らず／＼繰返されて來てゐるやうに思はるのである。即ち或る期間頻りに主觀味の勝つた歌を詠んでゐたとすれば、(それを假に動的の歌と呼んだ)その次にはなるだけそれから離れた、靜かなものが詠みたくなる、そしてその入れ替らうとする場合に一冊に纏めておきたい心が起る、といふのではなからうかと不圖考へられたのである。どうして斯うなるか、たださうした一つの詠みぶりに倦んでさうなるのか、それとも他に何か理由があるか、それは自分にも解らぬ。

この三月十日、本書の原稿を持つて上京し神田の友人の許に泊つた。翌朝朝酒一杯の後縁側の柱に凭れてゐる處を寫真好の友人が撮影した。口繪にしてゐるのはその寫真である。

大正十二年四月廿一日、葉櫻に雨こまかき日、
沼津在の寓居にて、

若山牧水

空に立つ煙のかげに燃え入りて色さびはてし
 晝の野火かも(そのこ
 きさらぎや箱根萱山枯れはててさびぬる野邊
 を焼ける火のみゆ
 野火の火の遠見はさびしうちわたす枯田のな
 かの道をゆきつつ
 冴えかへり寒けき今日のうらら日に野火の煙
 の青みたなびく

野

火 (以下大正十年)

うば玉の夜空の闇に油火のごとき野火見え寒
 き風吹く(その二)
 ちりぢりに燃ゆるはさびし烏羽玉の夜空のや
 みに見えわたる野火
 里人のはなてる野火は遠空の闇にわびしく燃
 えひろごれり
 幼くて見しふる里の春の野の忘れかねて野
 火は見るなり

雪 解 川

たまたまに出で来てわたる狩野川の水は張り
 たり雪解日和に
 假橋をわたれば寒き風吹くや雪解の川の水み
 なざりて
 橋錢をはらひてわたる假橋の板あやふくて寒
 き春風

箴 の 音

かすかなる羽蟲まひをり窓のさきけぶらふ春
 の日ざしのなかに

畑中の草にうごける風ありてけふ春の日のう
 ららけきかも
 かぎろひの昇りをるみゆ白菜はくさいの摘みのこされ
 し庭の畑に
 窓下の霜の畑にかぎろひのたつ日をきこゆ隣とな
 家の機はたは
 藁屋根の軒端をぐらき北窓に起りゐて澄めり
 その箴をさの音ねは
 わが畑のさきの藁屋根いぶせきにその家の妻
 は機織りいそぐ

窓あけて見てをれば畑のま向ひの家に織る機
 いよいよよきこゆ
 畑爲事いまをすくなみ百姓の妻が織る機ひね
 もすきこゆ
 はるかなる聲にしきこゆ庭にいでて呼びかは
 しあそぶ妻子が聲は
 庭さきの屋敷畑にかぎろひののぼるを一日ひとひ見
 つつさびしき

雲

雀

翔トひのぼり空の光にかぎろひて啼き入れる雲
 雀聞けばかなしもそのこ
 かそけくも影ぞ見えたる大空のひかりのなか
 に啼ける雲雀は
 天つ日にひかりかぎろひこまやかに羽根ふる
 はせて啼く雲雀見ゆ
 東風吹くや空にむらだつ白雲のしげきがなか
 に雲雀なくなり（そのこ）
 おほどかに空にうごける白雲の曇れる蔭に雲
 雀啼くなり

冬拾遺

時雨空小ぐらきかたにうかびたる富士の深雪
 のいろ澄めるかな
 門かど入れば庭の楓の散紅葉さびしくもあるか町
 のかへりに
 障子しやうじさし電燈ともしこの朝を部屋にこもれば
 よき時雨かな
 降りふらぬ寒き時雨の朝をいでて庭の落葉を
 見つつたのしき

わが門かどゆ眺むる富士は大方は見つくしたれど
 いよよ飽かぬかも
 この煙草味のにがきはわが心おちるぬ故か朝
 のひなたに

雑

詠

山の蔭此處の入江の奥まりに小波なみよせて梅の
 花咲けり(江の浦)
 笠なりのわが呼ぶ雲の笠雲は富士の上の空に
 三みつ懸りたり

砂丘すなのなぞへの畑の瘦麥やせむぎのほそき畝うねより啼き
 たつ雲雀(田子の浦)
 梅の花散りうかびたる池の面おもに降りしきる雨
 は音を亂さぬ(吐月峯庵)
 海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみ
 なくづれたり(静浦三首)
 向つ國伊豆の山邊も見えわかぬ入江の霞わけ
 て漕ぐ舟
 わがゆくやかがやく砂の白砂の濱の長手ながてにか
 ぎろひの燃ゆ

庭さきの一もと蜜柑春の日のかぎろふなかに
 實をたらしたり
 頬かむり冠りて縁にも縫へる妻がうしろで
 を親しとし見つ(縁側三首)
 もぎとりていまだ露けき椎茸を買へと持て來
 ぬ春日の縁に
 庭さきの籬根かきねのむかひゆく人にさゆるる日影
 かぎろひて見ゆ
 霞みあふ空のひかりに籠こもらひていろさびはて
 し富士の白雪

をちこちに野火の煙のけぶりあひてかすめる
 空の富士の高山
 入海の向つ國山春たけてあをみわたれる伊豆
 の國山(靜浦)

櫻と蝮 蝮

夕霽暮れおそきけふの春の日の空のしめりに
 櫻咲きたり
 雨過ぎししめりのなかにわが庭の櫻しばらく
 散らであるかな

さくら花まさかりのころを降りつぎし雨あが
 る見えて海の鳴るなり
 さらく花褪せ咲けるみゆめづらしくこよひを
 螻蛄の鳴ける夕に
 螻蛄の鳴く聲めづらしき春の夜のものしめ
 りは部屋をこめたり
 影あきらけきかな
 ひとところあけおく窓ゆかよひ来て灯かげに
 うごく春の夜の風

櫻と鶉

ひややけき風をよろしみ窓あけて見てをれば
 櫻しじに散りまふ
 春の日のひかりのなかにつぎつぎに散りまふ
 櫻かがやきて散る
 蠶豆のはたけの花の久しきに散りかかりたり
 さくらの花は
 庭くまの落葉の上に散りたまりさくら白きに
 鶉来てをる

朽葉なす鶉の腹のいろさびて歩めるあはれわ
が見てをるに

櫻 と 雀

雀子の啼く聲しげしこの朝明あさけふりいでし雨は
とほり雨ならむ
散りのこる梢の櫻雨すぎしこの朝照にちりい
そぐかも
けふあたり名残と思ふはなびらの櫻ほの白く
散りまへる見ゆ

散りたまる樋たもとの櫻のまひ立つや雀たはむれ其
處にあそぶに
わが借りて住へる家の古ければ多き雀子朝夕
になく

鹽 釜 櫻

曉の明けやらぬ闇にふりいでし雨を見てをり
夜爲事を終へ

うすれゆく曉闇にあめ降りて鹽竈しほがま櫻ざくらさむけく
ぞみゆ

ひともとの稚木わかぎのさくらしほがまの八重咲く
 花の咲きしだれたり
 稚木なる枝をみじかみたわたわに咲きかたま
 れる鹽竈櫻

庭

わが小犬あそびどころとあそびをる庭の芝生
 にわれも出でたり
 數あらぬ庭木をわたる春風のとよみてきこゆ
 わが立ち寄れば

桃さくら咲きつぐなかにわが庭の松のしん白
 く伸びそろひたり
 庭に出でてみるわが部屋のうす暗く冷たきさ
 まのなつかしきかな
 雲雀なく空の青みのけぶらひて心うら悲し庭
 に立ちつつ
 庭先の松のしげみに立ちてゐて聞くとしもな
 き鶯のこゑ
 わが門を流るる溝のみぎはなる藪にこもりて
 うぐひすの啼く

小松原

川向ひつづきはるけき野の窪の小松が原に霞
 たちたり(そのこ
 おほどかに傾斜なぞへつくれる小松原小松のしんは
 伸びそろひたり
 川向ひ小松が原の廣原にこもりゐてうたふ唄
 聲きこゆ
 松原の廣きに起りひとところ動かぬ唄をきき
 て久しき

松原の廣きがなかに立ちまじる雑木の若葉け
 ぶらひてみゆ
 鶯は巢のそば去らず啼く鳥の啼きてこもれり
 小松が原に(そのこ
 松原のはしの岩山岩が根の裂目をつづる丹につ
 つじの花
 ところどころ岩あらはなる山窪の小松が原に
 うぐひすの啼く
 伸びそろふ小松のしんのほの白くけぶらふ原
 にうぐひすの啼く

河

鹿

丸木橋しめりあやふきあけほの曙にわがわたりゆけば
 河鹿なくなり(湯ヶ島にて)
 水際みぎはなる岩のしめりのまだ深きこの曙を河鹿
 なくなり
 山魚やまめ釣ると人身を臥せて這ひてをる岩の上な
 る山櫻花
 溪ばたの湯槽ゆたにをりて玻璃窓のうるほふみれ
 ば朝明くるなり

吾子富士人

水上みなかみの峽間せきまを深くとざしたる雲はうごかで朝
 あけむとす
 榎の葉ぞしげり垂りたる瀬の音は其處におこ
 りて部屋にかよふなり
 溪ばたの榎のかがやきふかみつつわびしき春
 の晝となりゆく
 溪端の浅き木立の椿の花ちりのこりゐて河鹿
 なくなり

四月廿六日次男誕生、富士人と名づく、今までに
なき可愛ゆさを覺ゆるも早や父となりはて
し心からにや。

春の夜の曉かけてさし昇る月にかすめり香貫
の山は(その一、産婆をよびに)
麥の穂にをりをりさはりゆく路に月のさしる
てころかなしも
生れ来てけふ三日を経つ目鼻立そろへるみれ
ば抱かむとぞおもふ(その二)
貧しくてもはやなさじとおもひたる四人目の
子を抱けばかはゆき

兄ひとり姉のふたりに増すとさへ思はれてこ
の子いとしかりけり
吾子いまし睡入るとすらし泣聲のかすけくな
りて守唄きこゆ
四人をる吾子のなかなるすゑの子のみづごか
はゆしわが年ゆゑに(その三)
四人目の末のみづごのとりわけてかはゆしお
のれ病みがちにして

病み易くて

年月としつきのつかれ出で来てわが病めば咲きてあざ
 やけき夏草の花(そのこ)
 つぎつぎに病みてしをれば家ごもり庭掃きく
 らす草花を植ゑ
 むしあつき梅雨あがり日を風邪ひきて汗なが
 しつつ庭木見てをる(そのこ)
 かりそめに冷えしとおもふたちまちに風邪ひ
 きてこころ寒けかりけり
 汗くさき風邪の床出で庭先の花に水やる咳せき
 むせびつつ

雨土あつど用と今年いふべき雨おほき夏をこもりて
 風邪ひきくらす

梅

雨

生垣に木こがくりみゆる門かどさきの田植の人に雨
 のふるなり
 雨いよよふれば田植うる人人の寄りきていこ
 ふわが門の木に
 さやさやと音たてて來し雨脚あまのいま降りかか
 る窓さきの木に

梅雨ふるや瓶びんに挿せればくれなるのしみじみ
深きダアリヤの花

梅 雨 晴

うす日さす梅雨の晴間に鳴く蟲の澄みぬるこ
ゑは庭に起れり
雨雲の低くわたりて庭さきの草むらあをみ夏
蟲ぞ鳴く
一重咲ダリヤの花のくれなるの澄みぬるかな
や梅雨ばれの風に

眞白くぞ夏萩咲きぬさみだれのいまだ降るべ
き庭のしめりに
雀とると飽かぬ仔犬がたくらみの小走りをか
し梅雨の晴間を

或 る 朝

この朝を事あるらしき燕つばきのさへづりきこゆ庭
木の風に
苔のうへ這ひゆく蟻に心とまるこのわびしさ
のなほ深めかし

ゐつたちつわびしき時は軒下の鶏とりに餌をやり
 親しむ事す
 わが門のまへうちわたす狭青田あせのはるけきか
 たに田草とるみゆ

草

花

橋こえて入るわが門かどの庭路に植ゑならべたる
 コスモスの苗
 コスモスの茂りなびかひ伸ぶみれば花は咲か
 すもよしとしおもふ

借り住ふふるき邸のくまぐまのすたれし園に
 時の花咲く
 時くれば咲きつぐ花を八重むぐら荒れたる庭
 に見つつ樂しき
 居てみるやならびて咲ける草花の色香とりど
 りに飽く花ぞなき
 目に見えて肥料こやし利ききゆく夏の日の園の草花咲
 きそめにけり
 朝夕に咲きつぐ園の草花を朝見ゆふべ見ここ
 ろ飽かなく

いま咲くは色香深かる草花のいのちみじかき
夏草の花

泡雪あわゆきのましろく咲きて莖につく鳳仙花ほうせんかのはな
の葉ごもりぞよき
雪なせる白きをみれば鳳仙花ほうせんか咲き競ふ色のこ
れに如かめや
朝夕につちかふ土の黒み来て鳳仙花のはな散
りそめにけり
鳳仙花いろとりどりに取り置かむ種を選ぶと
しめむすぶなり

夏の雨

飯いかしぐゆふべの煙庭に這ひてあきらけき夏
の雨は降るなり(そのこ
はちはちと降りはじけつつ荒庭の穂草がうへ
に雨は降るなり
にはか雨降りしくところ庭草の高きみじかき
伏しみだれたりそのこ
澁柿のくろみ茂れるひともとに瀧なして降る
ゆふだちの雨

こもりゐる

北南あけはなたれしわが離室はなにひとりこもれば
 木草見ゆなり
 青みゆく庭の木草にまなこおきてひたに静かに
 籠れよとおもふ
 めぐらせる大生垣の横の葉の伸び清らけしこ
 もりゐてみれば
 門口かどのふりぬる橋のみじかきをわたりわたらず
 あそぶ夕暮

疲 勞

こもりゐる家の庭べに咲く花はおほかた紅あかし
 梅雨あがるころを
 焚く香かうのにはひほのかにこもりたる夏けごもりの
 わが部屋をよしとす
 かきこもり此處に住めれど明日知らぬ家なし
 人は家をおもへり

怠たけるてくるしき時は門かどに立ち仰ぎわびしむ
 富士の高嶺を

怠けつつ心くるしきわが肌の汗吹きからす夏
 の日の風
 門口を出で入る人の足音に心冷えつつ怠けこ
 もれり
 心憂く部屋にこもれば夏の日の光わびしく軒
 にかぎろふ
 なまけをるわが耳底に浸みとほり鳴く蟬は見
 ゆ軒ちかき松に
 無理強ひに爲事いそげば門さきの田に鳴く蛙かはッ
 みだれたるかな

蚤のゐて脛をさしさするぐるしさ日の暮れぬ
 まともの書きをれば
 わが側そばに這ひよる蜘蛛を眺めゐてやがて殺し
 ぬ机のかげに

庭の畑

275
 しこ草の茂りがちな庭さきの野菜畑に夏蟲
 の鳴く
 葱苗のいまだかぼそくうす青き庭の畑は書齋
 より見ゆ

いちはやく秋風の音をやどすぞと長き葉めで
 て蜀黍は植う
 その廣葉夏の朝明によきものと三畝がほどは
 芋も植ゑたり
 もろこしの長き垂葉にいづくより來しとしも
 なき蛙宿れり
 今は早や振がむと思へど惜しまれて見つつた
 だ居り蜀黍の實を
 紫蘇のたぐひは黒き猫の兒のひたひがほど
 の地に植ゑたり

青紫蘇のいまださかりをいつしかに冷やし豆
 腐に我が飽きにけり
 朝ゆふべつちかひながらわが植ゑしものた
 ぐひに愛憎のわく

夏 富士

雲まよふ梅雨明空のいぶせきに曉ばかり富士
 は見らるる
 紫に澄みぬる富士はみじか夜の曉起きに見る
 べかりけり

たづね来て泊れる人をゆり起す夏めづらしき
 今朝の富士見よ
 めづらしくこの朝晴れし富士が嶺を藍色ふか
 き夏空に見つ
 陰ふくみ湧き立ち騒ぐ白雲のいぶせき空に富
 士は籠れり
 叢雲にいただき見する愛鷹あしたかの峰の奥ぞと富士
 を思へり
 夏雲の垂りぬる蔭にうす青み沼津より見ゆ富
 士の裾野は

雑

詠

梅雨晴のわづかのひまに出でてみる庭の柘榴ざくろ
 の花はまさかり
 散りたまる柘榴の花のくれなるをわけてあそ
 べり子蟹がふたつ
 ゆきあひてけはひをかしく立ち向ひやがて別
 れてゆく子蟹かな
 庭木草あをみくろすみ茂りゆく梅雨夏かけて
 わびしかりけり

生垣の楨の若葉の色ふかみ土用わびしき風は
 吹くなり
 いささかの蜨煮しじみなむと眞清水にひたし生けお
 く夏のゆふぐれ
 伸びすぎて葉のみしげれる蜀黍もろこしに紅べにの毛たら
 す實をいまだ見ず
 ひとの畑の蜀黍は瘦せて實をもちつわがのは
 ただに青みしげれり
 桃色の緋桃のいろの耳朶みみたぶの少女は泳ぐ邊浪なみが
 なかに

岸邊こそ浪は繁けれ沖邊さし泳ぎてゆけや耳
 あかき子よ
 蟻の蟲庭這ひめぐり群がれる眞黒き姿眼にい
 たきかな
 蟻の蟲庭這ひめぐり日に透きて青き葉蘭の葉
 かげにも見ゆ
 繁山のしげりて黒き愛鷹あしたかの峰のとがりの夏の
 色濃さ
 片空に凝りゐる雲の下かげに長き尾ひけり富
 士の裾野は

みじか夜のいまだ小暗き明方のとほ山に湧く
 雲の眞白さ
 蟬なくや西ゆひがしゆ庭の木ゆ或は軒端の廂
 ゆ聞ゆ

温泉宿の庭

更けぬればひびき牙えゆく築庭の奥なる瀧に
 聞き恍ほけてゐる(吉奈温泉にて)
 燈火のとどかぬ庭の瀧の音をひとりききつつ
 戸をさしかねつ

水口につどへる群のくろぐろと泳ぎて鮒も水
 も光れり
 鶺鴒あきつ蛙子あそび恍ほけ池にうつれる庭石
 のかげ
 まひおりて石菖せきしょうのなかにものあさる鶺鴒の咽の
 喉どの黄いろき見たり
 庭石のひとつひとつに蜥蜴としかひゐて這ひあそぶ晝
 となりにけるかな

裾野村

日の光つゆけき朝の豆畑のなかみちゆけば埃
立つなり

籬木むらさきむらさきに咲く裾野村石ころ路を日暮
下れり

杉山の木叢がうへにかかりたるゆふぐれの月
は十日ごろの月

みそ萩の花さく溝の草むらに寄せて迎火たく
子等のをり

みそ萩の花にはこりのほのみえて葉がくれに
ゆく水の音きこゆ

盂蘭盆に今宵ありけりみそ萩の花咲く溝を見
つつ思へば

蝸の鳴くゆふぐれの旅籠屋に煙草ほろにがく
喫ひてをるなり

竹やぶに鶏をりてものあさるけはひ久しき夏
の夕ぐれ

畦に立つ蜀黍の葉の長き葉の垂りてつゆけき
今宵の月夜

とびとびに立ちてさびしき月の夜の蜀黍は見
ゆ桑畑の畔に

鶺鴒と河鹿

脚ほそき鶺鴒いたきどり鳥は岩蔭にわがをる知らず岩の上上に啼く

水あげて瀬に立ちならぶ石ごとに糞ふんしてあそぶ鶺鴒いたきどり鳥

羽蟲まつ河鹿が背せまは瘦せやせて黒みちぢめり飛沫しぶきのかげに

淵尻の岩端いはなにゐて羽蟲とる河鹿しばしば水に落つるなり

岩の間あひをねりて流るる山溪の荒瀬に水の玉湧き流る

夜の蟬

目ざめゐて夜半の暑きに耳を刺す蟬の聲おほし家のめぐりに

夜をさわぐをちこちの蟬のけうときに馬追蟲は蚊帳に来て鳴く

秋近し

何はなくたべむと思ふたべものも秋めくもの
 かこもりてをるに
 畑なかの小徑こみちをゆくとゆくりなく見つつかな
 しき天の河かも
 天の河さやけく澄みぬ夜ふけてさしのぼる月
 のかげはみえつつ
 うるほふとおもへる衣きぬの裾かけてほこりはあ
 がる月夜のみちに
 野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて
 消ゆなり

園の花つぎつぎに秋に咲きうつるこのごろの
 日のしづけかりけり
 うす青み射しわたりたる土用明けの陽ざしは
 深し窓下の草に
 秋づきしものけはひに人のいふ土用なかば
 の風は吹くなり
 愛鷹あいたかの根に湧く雲をあした見つゆふべみつ夏
 のをはりと思ふ
 明け方の山の根にわく眞白雲わびしきかなや
 とびとびに湧く

大野原の秋

富士の南麓にあたる裾野を大野原と呼ぶ、方十里にも及びたらむか、見る限りの大野原なり。

富士が嶺や裾野に來り仰ぐときいよよ親しき
山にぞありける
富士が嶺の裾野の原の眞廣きは言ことに出しかね
つただにゆきゆく
富士が嶺に雲は寄れどもあなかしこ見てある
ほどにうすらぎてゆく

大わだのうねりに似たる富士が嶺の裾野の岡
のうねりおもしろ
穂すすきの原まひわたるつぶら鳥うづらの鳥
は二つならびとべり
つつましく心なりゐて富士が嶺の裾野にまへ
るうづら鳥見つ
富士が嶺の裾野の原のくすり草せんぶりを摘
みぬ指いたむまでに
富士が嶺の裾野の原をうづめ咲く松まつ蟲草むしぐさをひ
と日見て來きぬ

なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ富士
が嶺の夕まぐれかな

茅 萱 が 原

かすかなる花にもあれや背低松たちならぶ岡
の茅萱がやの花は
はたはたと茅萱が原の日あたりに機織蟲は音
たててとぶ
飛ぶかげのをりをり見えて萱原の垂穂が原に
蟲の鳴くなり

秋の野を朝明あきけ登ればおきわたすしら露の上に
落つる吾が影

東 京 ま で

近年胃腸の衰へたる事甚し、信濃なる白骨温泉
はその病によしとききて九月中旬遙々と沼津
より出て立つ。

まひのぼる朝あがり雲の渦卷の眞白きそらに
富士の嶺見ゆ
うとうとと汽車にねむればときをりに法師蟬
きこゆ山北あたり

相模なる松田の驛に下りてゆく小間物商も秋
めけるかな

秋風の藍色の海に三つ二つうかびゐてちさき
海人の釣舟

川向ひ松原のかげの桑畑に吹く秋風はみだれ
たるかな

白骨温泉

山路なる野菊の莖の伸びすぎて踏まれつつ咲
けりむらさきの花

おほかたの草木いろづける山かげの蕎麥の畑
を刈り急ぐ見ゆ

湯の宿のゆふべとなれば躬みづからおこしい
そしむこれの炭火を

消えやすき炭火おこすといつしかにこころね
もごろになりてゐにけり

露干なば出でてあそばむあかつきの薄が原の
露のかがやき

四方の峰曇りて薄輝かぬ野なかの樺に百舌鳥
のゐて啼く

來て見れば山うるしの木にありにけり樺の林
の下草紅葉

冬山にたてる煙ぞなつかしきひとすぢ澄める
むらさきにして

枝ほそき落葉木立にくれなるの實をふさふさ
と垂らす木のあり

銅なす落葉の木木のかがやきをひもすがら見
て山ゆくわれは(上高地へ)

上高地附近

上高地附近のながめ優れたるは全く思ひのほ
かなりき、山を仰ぎ空を仰ぎ森を望み溪を眺め
涙端なく下る。

いわけなく涙ぞくだるあめつちのかかるなが
めにめぐりあひつつ

またや來むけふこのままにゐてやゆかむわれ
のいのちのたのみがたきに

まことわれ永くぞ生きむあめつちのかかるな
がめをながく見むため

山七重わけ登り來て斯くばかりゆたけき川を
見むとおもひきや(梓川)

たち向ふ穂高が嶽に夕日さし湧きのぼる雲は
いゆきかへらふ

わが伴へる老案内者に酒を與ふれば生來の好物なりとてよるこぶこと限りなし。

老人とよりのよるこぶ顔はありがたし残りすくなき
いのをもちて

燒嶽頂上

上高地より燒嶽に登る、頂上は阿蘇淺間の如く巨大なる噴火口をなすならずして隨所の岩蔭より煙を噴き出すなり。

群山のみねのとがりのまさびしく連なれるは
てに富士の嶺見ゆ
登り來て此處ゆのぞめば汝なれがすむひんがしの
かたに富士の嶺見ゆ(繪葉書にかきて妻へ)
岩山の岩の荒肌ふき割りて噴きのぼる煙とよ
みたるかも
わが立てる足もとにひろき岩原の石のかげよ
り煙湧くなり
聽きすます耳にしみ入り足もとに湧き昇る煙
とよみたるかも

降りゆく^おとわが見おろせば秋日さし飛驒の山
川うららけく見ゆ

原始林

燒嶽より飛驒國中尾村をさして下るに路二里
がほど斧鉞を知らぬ大森林のなかをゆくなり。

双手^{もち}もて杖をつきたて立ちいこふ森の深みに
わが心燃ゆ
まなかひの老樹の幹のつらなりを見るつつ心
さわだたむとす

岩山に大樹^{おほ}しみ立ち樹々の根の岩に苔むせり
森のかぎりに
時知らぬ樹々のよはひぞおもはるる森のかぎ
りの樹々をあふぎつつ
日の光とほく洩れ來つ老樹なる根方のわれに
射して寒けき
何の葉とかしこみてとる足もとのこれの落葉
は笠の大きさ
醜さは下下^ひの獸にさこそ似め岩這ひくだるわ
れの姿の

野口の築

そのすゑ神通川に落つる飛驒の宮川は鮎を以て聞ゆ、雨そぼ降る中を野口の築といふに遊びて。

時雨ふる野口の築の小屋にこもり落ちくる鮎
を待てばさびしき
たそがれの小暗き闇に時雨降り築にしらじら
落つる鮎おほし
築の簀すの古りてあやふしわがあたり鮎しらじ
らと飛び躍りつつ

かき撓たわみ白う光りて流れ落つる浪よりとびて
跳ぬる鮎これ
おほきなる鯉落ちたりとおらび寄る時雨降る
夜の築のかがり火

惠那曇

美濃の國中津町在永瀧の鳥舎といふに小鳥網
を見る。「小笠置晴れて惠那曇」と日和を占ふ土
地の言葉の通りの寒き朝なりき、小笠置は北に
惠那は南にそびゆ。

惠那ぐもり網張りて待つ松原のいろの深きに
 小鳥寄りこぬ
 惠那ぐもり寒けき朝を網張りて待てば囀のさ
 やか音に啼く
 小松原寒けきかげにかくされて囀のひはの啼
 きしく聞ゆ
 網張りて待つやささ鳥ちちちと啼きて空ゆ
 くそのささ鳥を

百舌鳥と鮒

秋百舌鳥の高啼くこゑは軒にひびき部屋に響
 きて居るにをられぬ
 吾をよぶ吾が子の聲のわびしさよをちこちに
 啼く百舌鳥ききをれば
 百舌鳥啼くや居るにをられぬわびしさの募れ
 る今朝を釣に出でゆく
 鮒釣るといそぐ田中のほそ路のゆきどまりな
 る藪に百舌鳥啼く
 冷やけき稻田の路をゆきすぎて通る豆畑にこ
 ほろぎの鳴く

藪かげに新聞紙敷きてかき坐り寄る鮒まつよ
一すぢの糸に
小舟もて釣りゆく人の羨しさよ竹藪かげに糸
を垂れつつ
陸釣は如何にやと棹の手をとめて聲かけてゆ
く沖釣人は

小鳥 鶉

夙くおきて机によれば木枯の今朝吹きたたず
鶉啼くなり

わが庭に來啼くひたきを知りそめて朝々待つ
ぞうれしかりける
枯芝に垂りたる梅の鏑枝にひたき啼きゐて冬
晴の風
枯落葉ちらばり動く風の日に鶉はひくき枝に
のみ啼く
まひうごく庭の落葉の色冴えて風あかるきに
鶉なくなり

煙草

眼にふりて惶あわたたしくもとりあげつ膝の蔭なりし
 これの煙草を
 うつつなく喫すひつけて口にふくみたる爲事な
 かばのいつぶく煙草
 よき煙草あしき煙草のけぢめなど忘れて今は
 ただに喫ふ煙草
 手離さぬ煙草にしあれどしみじみとうましと
 喫ふはいくたびならむ
 人目さけてひとりこもらふたのしさよ煙草の
 煙むらさきにたつ

夕日と食慾

木枯のをりをり響きわたりつつ窓の日ざしは
 いよよ澄みたり
 ガラス越し射す日ながらにわが頬にほてりお
 ぼゆる今日の冬の日
 わが窓のくもりガラスに含み照る冬の日ざし
 はあきらけきかも
 午ひるかけて窓に射したる冬の日ざし永しと
 たのしみ向ふ

落つる日のかがやきみせてガラス戸はいま冷
 やかに照りわたりたり
 夕日影窓につめたき部屋にゐてこよひは何を
 たべむと思へり
 身にしみてうましとおもふたべものを何はお
 きても食べたきゆふべ
 よるべなきけふの心のわびしさのかすかに動
 くたべ物の慾に
 このゆふべ食べたしと思ふ何ならむ思ひまは
 せどおもひあたらぬ

雑 詠

いつ注^つぐもこぼす癖なるウキスキイこぼるる
 ばかり注^つがでをられぬ
 わが舊き歌をそぞろに誦^ずしをればこころ風^なぎ
 來^きぬいざ歌詠まむ
 借り住まふ家の庭木のとぼしきに春はやくい
 でて^くぐひすの啼^く
 雪どけの雫^の軒^の端^ににあまねきに庭の木立にうぐ
 ひすの啼^く

とりどりの煙あがれり斑ら雪消えのこる春の
田末の町に

入江の冬

わが傍^{かたへ}追ひ越す人のあまたありて冬田の中の
路は晴れたり(静浦附近)

冬田中あらはに白き路ゆけばゆくての濱にあ
がる浪見ゆ

田につづく濱松原のまばらなる松のならばは
冬さびてみゆ

朝たけて晝と思ふに松原の松の根に這ふ冬の
靄かも

桃畑を庭としつづく海^{うま}人が村冬枯れはてて浪
ただきこゆ

海人が家^やに飼ふ者あらし入江なる冬枯の木に
鳩の群れをり

門ごとに橙^{だいだい}熟れし海人が家の背戸にましろき
冬の浪かな

冬さびし静浦の濱にうち出でて仰げる富士は
真^ま白^{しろ}妙^たなり

うねりあふ浪相打てる冬の日の入江のうへの
富士の高山(静浦より三津へ渡る、二首)

浪の穂や音にいでつつ冬の海のうねりに乗り
て散りて眞白き

冬日いまだ晝に昇らず小松山ひた折り合ひて影
のこまかさ(江の浦附近)

松山はかがりふかけど山の裏くぬぎが原の冬
日うららか

舟ひとつありて漕ぐみゆ松山のこなたの入江
藍の深きに

釣絲をものに巻きつつさざ波のかがよふ舟に
一人居る見ゆ

奥ひろき入江に寄する夕潮は流れさびしき瀬
をなせるなり

うち越えて路にあがれる浪の泡夕日にさむく
かがやけるかな

しみじみと寒き夕日になりにけり入江の奥に
波のさざめき

足もとにさわげる浪は満潮のゆたけき音をた
たへたるかな

網あぐる海人がさけびのもはらなる道のかた
 へに箴の音きこゆ
 曳網の綱の尻とり老いたるはその綱たたむ石
 の上にまろく
 舟に叫ぶ海人が叫びはおほかたは海人どちに
 のみきこゆべらなる
 大船の蔭にならびて泊せる小舟小舟に夕げむ
 り立つ
 大根を煮るにほひして小さな舟どち泊る冬
 の夕ぐれ

砂の上にならび静けき冬の濱の釣舟どちは寂
 びてましるき

伊豆石山

小松山なぞへの圓み掘りさきて冬の日なたに
 石切り出す
 沖爲事冬をすくなみ海人がどち入江の山に群
 れて石切る
 伊豆石のやはらかき石冬草の原につまれて眞
 白なるかも

見てあれば眞白きなかにむらさきのかすけき
 色す積まれし石は
 石山に立てる男の衣の色切り出す石に似て眞
 白なる
 己が身を繩にくくりつ千尋なす崖のさなかに
 居りて石切る
 眞白なる幕垂りなせる石山の崖に吊られて石
 切れり人
 人黒く並びゐて掘る石山の切りそぎ崖の冬の
 夕ばえ

石山の切りそぎあとのましろきに音立てて落
 つ眞白き石は
 石山の崖の端に立つ鏝廣の帽子の人のあざや
 けきかも
 海人が村裏の岩山にとりどりに洞をうがちて
 物置けり見ゆ
 おのづから遊びよげなるなぞへして冬草山は
 子等を遊ばす
 夕日射す冬野のなかに人うごき枯草の色あざ
 やけきかも

静かなれ心

年いつしか暮れむとするに驚きて惶しく刷ら
 せたる年賀状の端に書きつけし歌。

年ごとに年の過ぎゆくすみやかさ覺えつつ此
 處に年は迎へつ
 寄る年の年ごとにねがふわがねがひ心おちる
 て静かなれかし
 去年^{こぞ}あたり今年にかけていよよわが静かなれ
 とふこころは募る

あさはかのわれの若さの過ぎゆくとたのしみ
 て待つこころ深みを
 わが生きて重ねむ年はわかねどもいま迎ふる
 をねもごろにせむ

土肥温泉にて（以下大正十一年）

一月一日、沼津狩野川々口より伊豆國土肥温泉
に渡り十日あまり滞在す。

奥山にはだら雪積み伊豆の國の海邊柴山時雨
ふるなり（船中雜詠五首）

寒の雨しらじら降りて柴山のはづれにかかる
瀧のかすけさ

冬の雨しき降る海ゆ寄る浪の高くあがらず岸
に眞白き

崖下のうねりの浪にゆられつつこの小さき船
は岸に浴ひたり

冬さびて赤みわたれる斷崖の根に寄る浪はか
すかなるかな

柴山のかこめる里にいで湯湧き梅の花咲きて
冬を人多し

湯の宿のしづかなるかもこの土地にめづらし
き今朝の寒さにあひて

わが泊り三日四日つづき居つきたるこの部屋
に見る冬草の山

わが坐るま向ひの方ゆひびきくる冬の夜ふけ
 の海のとどろき
 この里に梅の花咲けりうちわたす枯柴山に杉
 は赤錆び
 北の風かすかに吹きて椿の葉枇杷の葉光り繡
 眼兒よく啼く
 少女にや嫗にや青き襟卷のくぐみゆく見ゆ霜
 田の末を
 麥を踏む背高き叟の頬かむりひねもすを居る
 其處の麥田に

冬草の山のくぼみの檜の木にのこる枯葉の色
 のさやけさ
 朝を注ぐ紅茶の色の檜の葉のなほ落ちやらす
 春立つといふに
 夕風の日和癖なる雲焼けて染め來るなりわが
 向ふ窓を
 雪もよひ寒けき空にうち群れて千羽鴉わたる
 この里の上を
 温泉尻ながれて湯氣のたつ濱の芥の霜に鴉群
 れたり

空に居る雲うす赤し入りつ日の消えのこりた
 る冬山のうへに
 わが向ふ冬草山の上に垂りて雪をふくめるあ
 かつきの雲
 雲いまだうかばぬ朝の凍空しみぞらの青みをかざる冬
 草の山
 柴山の尾根のわかれの山窪ゆ光さし来て昇る
 冬の日
 柴山の尾根よりいづる冬の日はひたと射した
 りわが坐る部屋に

山の端はにけぶらふ朝日麓田の枯田の霜をなか
 ば照せり
 朝日子の光とどかぬ麓田の奥の根方の田の霜
 ぞ濃き
 向つ山なぞへに立てる炭焼の煙にやどる冬の
 日のかげ

土地に梅おほし、暖き所とて一月初めにはや白
 白と咲き出づ、梅の歌五首。

道ばたの古寺のかどのたかむらの蔭に見出で
 し梅の初花

青竹のしみ立つかげにほそほそと枝を垂りつ
 つ咲けるこの梅
 ひややけき日蔭に咲ける白梅のしみみに咲き
 て花のちひささ
 たかむらの小暗き蔭に浮き出でて咲く梅の花
 は雪のちひささ
 この梅はものをかもしふ居向ひて久しくみれ
 ばいよよかはゆき
 伊豆の國に我が居て見やる海むかひ雪かづき
 伏せる甲斐信濃の山

甲斐信濃の山とわが思ふ遠山は雪をかづきて
 こちごちに立つ

妻、沼津より明日來らむといふ夜俄かに風の吹
 き立ちければ。

我妹子が明日を船出しわれを見に來むといふ
 今宵風吹き立ちぬ
 風の音つねならず身にこたふるは來ぬ我妹子
 をおもふゆゑにぞ
 末の子を抱きかきよせ今宵この風をなげきて
 あるらむ我妹

いとし兒を四人よたりまうけついつしらすをみなさ
 びしてよろしき我妹
 我妹子のころはひたにわれに向ふ我妹子の
 ころたもたざらめや

梅の歌

借り住まふ邸の庭にかぞふれば木がくれて咲
 く五本の梅
 春はやく咲き出でし花の白梅の褪あせゆくころ
 ぞわびしかりける

花のうちにはさかり久しき白梅の咲けるすがた
 のあはれなるかも
 老いたるは夙とく散りうせつ枝長き若木の梅は
 褪あせながら咲く
 ゆくさくさ仰ぎてすぐるわが門かどのあせぬる梅
 をうとみかねたり
 庭石の錆びたる上に枝垂れて咲きぬる梅の花
 のましろさ

とある酒場にて

停車場に人を送りてかへるさの夜更に寄れる
酒場の三人ぞ

いとほだらに鬢の毛白き老教授はウキスキイ
を呼ぶわれも然かせむ

テールの上枝張れる盆栽をかたよせて語
る夜ふけの三人

話やがて深山の鳥の聲に及びわれおもひいで
ぬくさぐさの鳥を

秋空にとべる尾長の尾長鳥のさびしき姿をお
もひいでたり

みちのくに豆蒨鳥と呼ぶ鳥の郭公の聲をおも
ひいでたり

山ざくら

三月末より四月初めにかけて天城山の北麓なる
湯ヶ島温泉に遊ぶ、附近の溪より山に山櫻甚だ
多し、日毎に詠みいでたるを此處にまとめつ。

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむ
とすなり山櫻花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづ
もれる山ざくら花

花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむ
ける山ざくら花

かき坐る道ばたの芝は枯れたれや坐りて仰ぐ
山ざくら花

おほみ空光りけぶらひ降る雨のかそけき雨ぞ
山ざくらの蔭に

瀬々走るやまめうぐひのうろくづの美しき春
の山ざくら花

山ざくら散りしくところ眞白くぞ小石かたま
れる岩のくぼみに

つめたきは山ざくらの性さかにあるやらむながめ
つめたき山ざくら花

岩かげに立ちてわが釣る淵のうへに櫻ひまな
く散りてをるなり

朝づく日うるほひ照れる木こがくれに水漬みづける
ごとき山ざくら花

峰かけてきほひ茂れる杉山のふもとの原の山
ざくら花

吊橋のゆるるあやふき渡りつつおぼつかなく
も見し山ざくら

椎の木この木むらに風の吹きこもりひと本咲け
 る山ざくら花
 椎の木のしげみが下のそば道に散りこぼれた
 る山ざくら花
 とほ山の峰を越この雲のかがやくや峰のこなたの
 山ざくら花
 ひともとや春の日かげをふくみもちて野づら
 に咲ける山ざくら花
 刈りならず枯萱山の山はらに咲きかがよへる
 山ざくら花

萱山にとびとびに咲ける山ざくら若木にしあ
 れやその葉かがやく
 日は雲にかげを浮かせつ山なみの曇れる峰の
 山ざくら花
 つばくらめひるがへりとぶ溪あひの山ざくら
 の花はお榎せにけるかも
 今朝の晴青あらしめきて溪間より吹きあぐる
 風に櫻ちるなり
 散りのこる山ざくらの花葉がくれにかそけき
 雪と見えてさびしき

山ざくら散りのこりゐてうす色にくれなるふ
ふむ葉のいろぞよき

富士の歌

或る日天城山なる噴火口の跡と云へる青篠の池に遊ぶ、ゆくゆく願れば富士うららかに背後に聳えたり。

わが登る天城の山のうしろなる富士の高きは
あふぎ見飽かぬ

高山にのぼらざれば高山の高きを知らずとか云へる言葉ありしをおもひ出でて一首。

たか山にのぼり仰ぎ見高山のたかき知るとふ
言ことのよろしさ
山川に湧ける霞のたちなづみ敷きたなびけば
富士は晴れたり
まがなしき春の霞に富士が嶺の峰なる雪はい
よよかがやく
富士が嶺の裾野に立てる低山の愛鷹山あしたかやまは霞み
こもらふ
愛鷹あしたかの裾曲すそまの濱のはるけきに寄る浪しろし天
城嶺あきねゆ見れば

伊豆の國と駿河の國のあひだなる入江のま中
漕げる舟見ゆ

湯ヶ島雜詠

うちわたす萱野が原の枯萱は刈りならされて
積まれたる見ゆ
瀬々に立つあしたの靄のかたよりてなびかふ
藪にうぐひすの啼く
この岩の苔の乾きのぬくときに寝てをれば見
ゆ淵にあそぶ魚

ひたひたと水うちすりてとぶ鳥の鶴いたたき多しこ
の谷川に
たぎち落つる眞白き水のくるめきのそこひ青
めり春の日なたに
岩窪の砂のたまりに荒溪のしぶきは飛び來く日
のいろに照り
かちわたり濡れし足ふく川ばたの枯芝原のつ
ぼすみれ花
人の來ぬ谷のはたなる野の天湯のぬるきにひた
るいつまでとなく

椎の落葉ちりたまりゐてくされたる野の天てんいで
 湯に入りてひそけし
 淵尻の浅みの岩に出でてをるかじかのすがた静か
 なるかも
 やはらかく芽ぶける木木にかくろひて散りの
 こりたる山椿の花
 窓さきの冬の木に来て啼く鳥は昨日もけふも
 山雀やまがらの鳥
 目白鳥なきすぎゆけば朝静あさしづの庭木がうれに山
 雀の啼く

石菖せきしょうの花咲くことを忘れぬきうすみどりなる
 石菖せきしょうの花
 道うへの井手に茂りて片なびく石菖草せきしょうぐさの風の
 かがやき
 なめらかに水越えおつる濡石ぬいしに鶴いしたたき鴿たきゐて啼く
 聲きこゆ
 ならび立つ赤松が根の下草のしげみの露に小
 鳥なくなり
 わが宿のいで湯の湯氣のすゑのびて谷むかひ
 なる杉山に見ゆ

吊橋の上は木立のさびしさよ川下とほき瀬々
 の月かげ
 瀬々に立つ石のまるみをおもふかな月夜さや
 けき谷川の音に
 鐵瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくい
 ざわれも寝む(深夜獨酌)
 梨の木にまとへる藤の咲きいでて梨かとぞま
 がふ梨の花のあひに
 茂り葉にこもりて白き房花の咲きしだれたる
 茂り葉馬酔木

雪なせるみじかき房のすすなりに咲きて垂り
 たり馬酔木の花は
 岩ごとにせまりて白き瀬をなせるたぎつ谷川
 に釣る山魚なり
 青あらし吹き落ち来る谷川の椎の木かげをゆ
 き行きて釣る
 川下ゆ釣りもて来る二人づれの釣るとも見え
 ず飽くとしもせぬ
 踏みわたる石のかしらの冷やかさ身にしむ瀬
 瀬に河鹿なくなり

なめらかに石こゆる瀬にまひあそぶ羽蟲とり
 つつ啼くや河鹿は
 山かげの日ざしかげれば谷川のひびきも澄み
 て河鹿なくなり
 照り澄める春くれがたの日のいろにひたりて
 立てるとりどりの木よ
 なびきあふとりどりの木のいろどりや春くれ
 がたの嵐吹く山
 山そばのかけ橋わたる春の日に匂ふ若葉のな
 かのかけ橋

山そばのかけ橋わたるわれの上に啼きすまし
 たるうぐひすの聲
 湯げむりの立ちおほひたる谷あひの湯宿を照
 らす春の夜の月
 まなかひに見るおもひして我妹子わきこに文ふみかきを
 れば河鹿なくなり(三首妻へ)
 やよ汝ななが心かよわさ清らかさ山ざくらの花に
 似すと云はめやも

井手の鮎子

大川を堰ける野中の井手に入りて泳ぎたはむ
 るる鮎の子の見ゆ
 うすらかに道の埃のまひ浮び水皺寄る瀬にお
 よぐ鮎見ゆ
 水を掩ふ藪いたどりの葉かげなる羽蟲に跳ぬ
 る鮎の子の群
 うちむれておよぐ鮎子にほどのよき井手の流
 の瀬のつよみかな
 この春の日照をおほみ石垢の深き淺瀬をおよ
 ぐ鮎子等

なめらかになびく川藻のひとふさのなびける
 蔭をゆける鮎の子
 なめらけき尾鰭のふりや淺き瀬の石の垢つつ
 く鮎の子がふり
 なめらかに日のさす石のかげにゐて尾鰭さや
 けくおよぐ鮎の子

大御姿

或る日の新聞に皇太子殿下の御肖像を大きくや
 かなる寫眞版として掲げたり、乃ち壁にかけ
 仰ぎまつりて歌へる歌。

かむながら神のみするにましまして親しき君
 におはすかしこさ
 わが兄^せ子^こといはまほしきぞかしこかる大みす
 がたにむかひまつりて
 しもじものわれ等がまをす言^{こと}の葉も聽かせた
 まふとおもふかしこさ
 久方のあめのもなかを渡る日はればれしさ
 に君はおはせり
 山川も寄りてつかへむををしさをもたせます
 かも大みすがたに

おほどかにゑみておはせばあなかしこゆたけ
 きおもひわれらもぞする
 事しげき御代をはるけくのぞまして笑ませた
 まふか大みすがたは
 この國ぞ若^{わか}しかぐはししろしめす日^ひ嗣^{つぎ}の皇^み子^こ
 をいま見るがごと

大野原の初夏

富士の麓大野原の秋は既に知りぬ初夏の野原
 のながめいかならむとて六月初めまた其處に
 遊ぶ。

眞日中の日蔭とぼしき道ばたに流れ澄みたる
 井手のせせらぎ
 道にたつ埃を避けて道ばたの桑の畑ゆけば桑
 の實ぞおほき
 桑の實を摘みて食べつつ染まりたる指さきか
 はゆ童^{わらは}さびして
 土ほこりうづまき立つや十^{とせ}あまり荷馬車すぎ
 ゆく夏草の野路に
 埃たつ野中のみちをゆきゆきて聞くはさびし
 き頬白の鳥

道ばたに埃かむりてほの白く咲く野^の茨^{いばら}の香こ
 そ匂へれ
 熟れわたる麥のにはひは土埃まひ立つ道に流
 れたるかな
 白うつぎ紅^{べに}うつぎ咲く野の藪の茂みに居りて
 うぐひすの啼く
 麥の穂のみなかきたれてふくみたる夕日のい
 ろのなやましきかな
 麥畑のひとところ風の吹きたてば夕日は亂る
 その穂より穂に

日をひと日富士をまともに仰ぎ来てこよひを
 泊る野の中の村
 ゆふぐれの山の青みにこもりゐて啼きほうけ
 たるくろつがの鳥
 ひそやかにものいひかくる啼聲のくろつがの
 鳥を聞きて飽かなく
 曉をうすら白雲わき出でていよよみどりなる
 若杉の山
 杉山の若き立木のくきやかに青みつらなれり
 山のなぞへに

朝山のみどりが下の道ゆけば露ふりこぼす百
 鳥のこゑ
 草の穂にとまりて啼くよ富士が嶺の裾野の原
 の夏の雲雀は
 青草を抜き出でてゆるる去年の秋の萩にゐて
 啼く巢立の鳥は
 此處の野にいま咲く花はただ一いろ紅うつぎ
 の木のくれなるの花
 ゆくりなく夏野が原にあらはれし眞黒き犬は
 遠くより吠ゆ

夏草の大野をこめて白雲のみだれむとする夏のしののめ
 雲雀なく聲空にみちて富士が嶺に消残る雪の
 あはれなるかな
 相添ひて啼きのぼりたる雲雀ふたつ啼きのぼりゆく空の深みへ
 寄り来りうすれて消ゆる水無月の雲たえまなし富士の山邊に
 張りわたす富士のなだれのなだらなる野原に散れる夏雲のかげ

夏雲はまろき環をなし富士が嶺をゆたかに巻きて眞白なるかも
 富士が嶺の裾野が原を照したる今宵の月は暈をかざせり

みじか夜

夜ふかくもの書きをれば庭さきに鳴く夏蟲の聲のしたしさ
 降りたてば庭の小草のつゆけきに蛙子のとぶ夏のしののめ

みじか夜の明けやらぬ闇にかがまりてもの
 苗植うる人のかげみゆ
 まだ起きぬひとの庭べに露をおびてさやかに
 咲ける夏草の花
 あかつきをいまだともれる電燈の灯ほかげはう
 つる庭のダリヤに

馬 追 蟲

やすらかに足うち伸ばしわが聞くや蚊帳かに來
 て鳴く馬追蟲を

めづらしく蚊帳にきて今なきいでし馬追蟲の
 姿をぞ思ふ
 家人かのねむりは深し蚊帳にゐて鳴く馬追よこ
 るかぎり鳴け

木 槿 の 花

はしり穂のみゆる山田の畔ほとごとに若木の木槿ひび
 咲きならびたりそのこ
 畑の隈風よけ垣の木槿の花むらさきふかく咲
 きいでにけりそのこ

風よけと山田の畔に垣なせる木槿の花はひとり
 咲きたり
 鋤きすててもはまだ植ゑぬ秋旱木槿は畔に咲
 きさかりたり

雑

詠

うちしぶき庭を掩ひて降りしきるゆふだち雨
 に匂ひ立つ土
 草木うつ雨はきこえてうす青き黄昏の色部屋
 をこめたり

花園の花のしげみを抜き出でてゆたかに咲け
 る向日葵の花
 このあたり風につめたき山蔭に咲きてあざや
 けきみそ萩の花
 秋づけどまだもろ草の青かるをぬき出でて咲
 けるみそはぎの花
 秋を咲く何百合ならむ山澤の草むらがくれく
 れなるに咲く
 女郎花咲きみだれたる野邊のはしに一むら白
 きをとこへしの花